

---

# 楽しく生きる為に

すいか

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

楽しく生きる為に

### 【NZコード】

NZ8267N

### 【作者名】

すいか

### 【あらすじ】

ゼロの使い魔の世界に転生した主人公！

転生先は平民ではあったものの、

主人公には主人公故に、誰にも無い特別な能力があった。

楽しく生きる為に、その能力を使って生きていく。

## 「能力設定」（前書き）

この能力設定についての解説には、物語内のネタバレが多分に含まれて居ます。

なので、物語を読んだ上でご閲覧いただければ幸いです。

## 【能力設定】

### アトラス

転生者であり、根源に接触した<sup>アカーシャ</sup>転生能力者でもある。樂天的で、楽しいことが大好きな少年。

といつても、享楽的ということではなく、過程を楽しむことも出来

る。……出来るはず。

戦闘能力は、アツクスマスター や、斧の技などの御蔭で、やたらめつたら攻撃力だけが高い（力が強い訳ではない）。

防御は紙装甲状態なので、対多数にはとことん向いていない。

ウォーロックに転職後は、敏捷性や素の力もそれなりに高くなつた。

### ジョブセッティング

アトラスの所持している『転生能力』。

十秒間握手した相手の職業を、自身が転職可能なジョブとしてストックすることが出来る能力。

同じ職業の人間でも、持つ素養が違う場合、複数人と握手することで、覚えられるアビリティを増やすことも可能。

本来なら、血族、素養的に無理な能力も大抵覚えることが出来るが、流石に種族的な能力は覚えられず、使えない。  
まだ完全に使いこなしているとは言い難い状態。

### ストックしたジョブ

- 『無職』 「LV -」
- 『農民』 「LV 4」
- 『ウォーロック』 「LV 0」
- 『メイジキラー』 「LV 0」

### 覚えたアビリティ

アクションアビリティ

農技

薪を割る「MAX」

マキ割ダイナミック「MAX」（元ネタ・ロマンシングサ・ガ系）

（人としてありえない程に飛び上がり、落下の勢いで薪を割る。当然薪は木つ端微塵）（樹属性に特効）

トマホーク投げ「MAX」（元ネタ・ロマンシングサ・ガ系）  
（斧をトマホークの如く投げて敵にぶつける技。技名を発言後、謎の力によつて急激に加速する）

ヨーヨー「MAX」（元ネタ・ロマンシングサ・ガ系）

（トマホーク投げで投げた斧が、なぜか戻つてくるバージョン。威力はトマホーク投げに劣る）

大木断「MAX」（元ネタ・ロマンシングサ・ガ系）

（マキ割、ダイナミックをパワーアップさせたような技）（樹属性に特効）

死んだ振り「MAX」

（ヒグマですら氣付かない精度の死んだ振り）

罠作成「MAX」

（時々気紛れで動物が引っかかるつてくれるような罠を作る）

竜言語魔法

なし

隙を狙う  
なし

リアクションアビリティ

平伏 「貴族が近くを通ると自動発動」

（あまりに潔くすっぱりした様子に、貴族も穏やかな気分になる）

サポートアビリティ

農業の心得

（農業をする際に必要な知識、最適な方法が自然と思い浮かぶ）

木こりの心得

(山菜採りや、薪を割る際に必要な知識、最適な方法が自然といふ)

なんちやつて狩人の心得

(弓を使う際や、獲物を狩る時に必要な知識、最適な方法が……  
思い浮かばない。でもちょっとだけ命中率が上がったりするかもしない)

アックスマスター（元ネタ：ラグナロクオンライン）  
(斧を握った際のみ、力が向上する)

ムーブアビリティ

山移動

(山を移動する際の速度が上がる)

森移動

(森を移動する際の速度が上がる)

## 「能力設定」（後書き）

割り込み投稿で新しいのを投稿していたのですが。  
ユーザーページで更新したことにならない上に、  
投稿する時に予約投稿も出来ないもので、  
ややこしいから一番前に移動させてみました。

## 第00話 アカーシャ（前書き）

はじめましての方ははじめまして。すいかという者です。

この作品を投稿しようと思ったのは、息抜き的な意味合いで、何か新しく書いてみたいなと思つた為です。

やはりこちらもですが、基本自分で楽しむ為に書いている小説なので、他の人が楽しめるかと云ふと、無理かもしません。ですが、楽しめる人が居てくれたら嬉しいですね。

さて、この小説を読む前の注意点として、

主人公は転生系のオリジン。しかも最強系で、原作についても捏造設定有りの、独自解釈もある上に、主人公のチート能力自体が、原作の設定を崩壊させてしまうのです。

更にはハーレムやパロネタもありとなつており、色々な人にとって、かなりの地雷要素が満載です。

この作品の主人公は、別段原作崩壊をさせようとは思つていませんが、思つていなだけで、好きに動くので、崩壊する可能性は大です。更に、主人公の行動によつて、原作キャラが迷惑を被ることもあるかと思います

それらに嫌悪感を感じる方、受け入れられない方は回れ右をお勧

めします。

ついでに、作者はかなりSS書きとして初心者なので、一度書いた文章を誤字を発見した時や気に入らない時に書き直したり、追加したりすることがあります。

それらが大丈夫という方は、どうぞ宜しくお願ひします。

## 第00話 アカーシャ

アカーシャといつ存在が居る。

アカーシャとは、サンスクリット語で「空」を意味し、また、「その中から物質が現れてくる空間」の意を持つ。そしてそれは、虚空より百千の事物が生じることを意味している。

しかし、この物語において、アカーシャとは、前述したものとは、全くの異なった意味を持っている。

黒い海。

巨大にて雄大、無限ともいえる程に広がるその海に、時折開くその“孔”は、黒い海の中において、尚映える黒い色をしている。

そう、“黒い”海の中ですら、一際映える“黒色”。

その“黒い孔”には、森羅万象、ありとあらゆる事象、存在、可能性、情報が存在して。

そして、ありとあらゆる、あると考えられる世界。

即ち、例えば、地球上の、誰もがこんな世界があればいいと思つた

「」とのあるような世界は全てが存在し得る。

それを可能性世界と呼ぶのだが、この“黒い孔”は、それら全ての世界と、繋がっている。

その“黒い孔”を、

「真理」「根源」「根源の渦」「アカシッククレード」

様々な呼び方で人は呼ぶが、  
確かなことは、その孔こそが、あらゆる事象の発端にして始まりで  
あり、  
あらゆる事象の意味であり理由。  
それはつまり、ありとあらゆる人間の想像、理解を超える“何か”  
達、  
その全てをすらも集約したものであること。

……

そして、黒い海だ。

『根源の渦』たる黒い孔と同じく存在する黒い海。それは、  
魂のスープとでも呼ぶべき“何か”であった。

死して、輪廻の輪へと移つた魂は、そのほぼ全てがこの黒い海へ

と還る。

当然、世界によつて法則は違つので、地獄、天国へと移る世界もあるが、殆どの世界において、魂はこの黒い海へと還る。

そして、海の中に溶け合い、人間ならば、人間として送つた一生により、得た人生の記憶、色とでも称するべきそれを、海に解けることによつて黒く染め、途方も無い程に長い年月をかけて色を落とし、

透明の魂に戻り、またあらたなる命として、何処かの世界へと落とされる。

故に、輪廻転生の後に記憶は無い。

これは、例えるならば、まず、色々な味のジュースを混ぜたものの中に、自分のアップルジュースを混ぜる。

その混ぜたジュースを蒸留する。さて、この蒸留したものが、アップルジュースである。なんてことがあり得るのか？ ということである。

しかし、これには例外がある。

その例外というのが、即ち、“黒い孔”である。

恐ろしく確率の低いことではあるが、現世にて死に絶え、黒い海

へと還る筈だつた魂が、

黒い孔の中へと入り込んでしまうことがある。

そうなつた場合、魂は、黒い孔に取り込まれるか、もしくは、黒い孔にある情報を、逆に取り込み、  
魂としての位階を上げることとなる。

#### 魂としての位階。

人間、亜人族、魔族、神族という風に、異なつた種族があるように、人間の魂、魔族の魂、神族の魂は、それぞれに位階が違ひ、その魂の存在としての“格”とでも言つべきものは異なつてゐるのだ。

例にあげた三つの魂では、人間 < 魔族 < 神族の順番に位階が高くなつていくのだが。

そして、黒い孔の情報を取り込み、この位階を上げた魂。

この魂は、魂としての格が上がつた為、この後、黒い孔より出でて、転生した時に、肉体ではなく、

魂から記憶を読み込み、肉体へと焼き付けることが可能になる。つまり、外付けのハードディスクのような存在となることを可能としているのだ。

故に、黒い孔を通り、転生した魂は、転生後も記憶を受け継がせることとなる。

しかし、そんな魂の中でも、更に希少なケースが存在する。

それは、『黒い孔』より手に入れた情報により、  
魂としての異質なる素養を能力という形で、手に入れるといふケース。

輪廻の環により手に入れたこの能力を『リンクースキル』と呼ぶ。  
根源の神の能力たる、あらゆる世界法則を実現する、『異界法則』、  
あらゆるものを作り出す、『創造と創生』。  
支天の巫女の能力たる、属性を自由自在に操る、『属性操作』。  
如何なるものもコピーする能力、『複製』。  
根源よりあらゆる可能性の生物を召喚する、『自由召喚』。

五眼として、過去現在未来の全てを見通す眼『天眼』、物事の本質  
を見抜く眼『慧眼』、あらゆる事象を視る眼『法眼』、  
そして、『肉眼』『天眼』『慧眼』『法眼』の全てを備えた眼『仮  
眼』。

神の持ち得る力である、六神通『天眼通』『神足通』『天耳通』『  
他心通』『宿命通』『漏尽通』。

吸血種の『略奪』……更には、あらゆる言語を理解する能力や、一度受けた技を記憶する能力、  
おまけに『二コボ』『ナデボ』『カコボ』『鈍感特化』などなど、  
多種多様。

あらゆる可能性の数だけ、リンクースキルは存在する。

通常の人間としては在りえないような、様々な何らかの能力。それ

こそがリンクアースキルである。

そして、このリンクアースキルを手に入れ、転生した存在のことを、

『アカーシャ』

と呼ぶ。

そして、このアカーシャこそが、この物語の主役となる存在なのだ。

## 第〇〇話 アカーシャ（後書き）

我ながら、何といつも一病ですか。

テンプレート的な神様チートに、独自設定をつけてやつてみました。この設定は一応、カエデ・コーブルの日々でも反映されていたりもします。

これは、どうでもいいことなのですが、カエデは念能力で、黒い魂の海の中に沈みながらも、取り込まれないようにしている訳ですね。だからカエデはやたらめつたら転生の度に苦しんでいふということです。

後、こちらは気分転換に書いてるので、かなり不定期になる可能性も高く、しかも文章がこんな感じで、カエデ・コーブルの日々以上に雑な感じになるかもです。

## 第01話 リンカースキル

……はじめまして。

僕の名前は、アトラス。

所謂お約束というか、転生者といつやつである。

ちなみに、何故自分が転生者であると判つたのかといつと、  
それはやつぱり、前世の記憶があるからなんだけど……。

そのことを自覚出来るよつになつたのは、つい最近のことだつたりする。

僕は、比較的裕福……？ になるのか、ガリアといつ国の、農業  
を営む村で暮らしている。

生まれは貴族……だつたら良かつたんだけど、農家で暮らしている  
ということもあり、平民である。

捨て子だった僕を拾ってくれた村の人達には、本当にいくら感謝し  
てもし足りない。

そういう訳で、まだ6歳だけど、僕も農家の仕事を手伝っていた  
りするんだよね。

まだ6歳だけど、働いていても、世界が違つんだから全くおかしくないよ、うん。

だから、例え朝から夜まで、畑を耕したり、薪を割つたり……なん  
てしても全然平氣なんだ！

本当に、いくら感謝してもし足りないよね。

さて、もう解つてもらえたかな？

この世界には、魔法というものが存在したりするんだ。  
とはいっても、魔法を使えるのは貴族のみ、平民には無理だし、  
貴族の人が、わざわざ農家ばかりの村に来るつていうことも、早  
々無いことなのか、

僕はまだ見た事が無い。

でも、見た事が無いとはいえ、大人の人達が、皆当たり前のよう  
に話しているんだから、

存在しないということは無い筈だと考えてる。

そして、ブリミル、ガリア、トリステイン、ゲルマニア。  
そういう単語を何度も聞いていれば、流石の僕でもどうこうしたこ  
となのか、

事情がのみ込めてもおかしくはないといふこと。

そう、ここは“ゼロの使い魔”の世界、もしくはそれに凄く酷似  
した世界といった感じの世界なんだと思つ。

つまり、テンプレートな転生物といつても過言ではない状況！

……といつても、僕は平民なんだけどね。

だけど、例え小説、あるいはそれに酷似した世界に生まれ変わったからって、

僕は別に、原作介入ひやつはー！ とか。

原作に関わらないようにしようと……怖いし。

とか、そういうことは考えていいなかつたりする。

僕がやりたいこと、しようと正在していることは、単純なこと。

やりたいようにやる。

折角の一回目の人生。精一杯楽しむ為に！

楽しく生きたい！ その望みの結果、原作に入れる事になつても、原作を避けることになつても、  
そんなことはどうでもいい。

楽しく生きることこそが、僕の目標なんだ。

だからこそ、僕を拾ってくれた村の人達には、感謝してもし足りない訳だけど、

いつまでもこの村で過ごしているつもりはない。

いつかは、この村を出て行くつもりだ。

……

とはいって、6歳の僕じゃ、村から出ても生きていくのは大変なの

はわかる。

平民だから、身を立てるのが大変というのが大きい。  
料理、鍛冶、勉学……何かが秀でて出来る訳でもない。

そんな僕のような人間では、例え転生者であつても、一人で生きていくのは難しい……。

だけど、僕には手段があつた。

そう、それは『リンクアースキル』というものの。

それこそが、僕が転生した際、記憶を持っていた理由でもあるらしい。

僕は、生まれ変わって、記憶を取り戻した頃、同時に自分が『リンクアースキル』を持つていることを知った。

僕の『リンクアースキル』の名前は……『ジョブセッティング』。

ありとあらゆる、存在しうる職業を、ファイナルファンタジータクティクス的な職業に変換し、自分の転職可能なジョブとして、ストックする能力……という何とも反則気味な能力だ。

これさえあれば、僕でも魔法が使えるようになるかも知れない！

そして、魔法が使えるということは、身を立てることも出来るようになる可能性が高い！

バラ色の人生間違い無し！

……だと思ったんだけど。

但し、この能力には条件があり、ジョブをストックする為には、対象ジョブを持った存在と、10秒間握手する必要がある。といふものだった。

さて、このでの問題は……。

Q・平民に貴族と握手する機会があるでしょうか？

A・あります。

という訳で、貴族と握手出来ないので、魔法はやっぱり使えないってことに……。

握手出来れば……。

と思うのだが、貴族なんて、この農家では見た事も無いので、どうしようもない……。

しかし、それで諦めたら楽しくない！

貴族と握手出来ないのなら、まずは村の人達と握手してみればいいじゃない！

という訳で、訝しげな顔をされたり、仕事をサボっていたら、今日のご飯は抜きになるぞ！ と怒られたりしつつ、村の大人達全員と握手してみたところ……。

## ジョブ

『農民』

アクションアビリティ

なし

リアクションアビリティ

なし

サポートアビリティ

なし

ムーブアビリティ

なし

……全員農民だった。な、なにを言つているのかわからないと思  
うが、考えてみれば当たり前だよね。

実際農民な訳だし。

むしろ、この中に山賊とか盜賊、メイジ殺しなんて職業があつたら  
本氣で怖いしね。

ともあれ、準備は整つた。

とつあえず、ジョブチョンジをして農民になつてみよつ。

〔 ˇ [ ジョ'ブチョンジ ] [ 農民 ]

頭の中で、何かガチリとまゐるよいつな音が聞こえる。

そして……。気が付けば、僕は農民になつていた。

いや、姿形で何かが変わつた訳じゃない。

だけど、農民になつたことが、理屈ではなく、 “解つた” 。

よしー！ これで今日から僕は農民だー！

早速ジョブレベルを上げてみよー！

## 〔農民〕

「畠仕事や、林業関係の仕事をすることで、ジョブレベルが上がり  
れる」

### アクションアビリティ

耕す「レベルで範囲拡大」

水をやる「レベルで範囲拡大」

薪を割る「レベルで切り株も割れる」

マキ割ダイナミック「薪を割る、必須」

（人としてありえない程に飛び上がり、落下の勢いで薪を割る。  
当然薪は木つ端微塵）

死んだ振り

（ヒグマですら気付かない精度の死んだ振り）

罠作成

（時々気紛れで動物が引っかかってくれるような罠を作る）

なんとなく射る

（命中率は最高50%）

下手な矢も数射りや当たる「なんとなく射る、必須」

（雨のように矢を射る技。命中率は10%を切るが、射る速度が  
半端ではない）

### リアクションアビリティ

平伏「貴族が近くを通ると自動発動」

### サポートアビリティ

農業の心得

木こりの心得

なんちゃって狩人の心得

ムーブアビリティ

山移動

何か、最初のほうが牧場物語の改造を彷彿させるんだけど、そんなことよりも……。

「……おい」

マキ割ダイナミックがあるよー 最高だよ農民って！ とこうか  
誰が持つてたんだよ！

マキ割ダイナミックとか滅茶苦茶したいよー  
とにかくそれ、木こりじゃないの！？

「ホン、かなり取り乱してしまった。

しかし、本当に誰が持つてたんだろ……マキ割ダイナミック……。

それに、農民と木こりと狩人が混ざってるみたいだけば、これは一杯握手したせいなんだろうか……。

……悩んでも解らない。

何にせよ、やることは決まつたみたいだ。

今日から、林業を頑張ろう。薪割り辺りから……。

とりあえず、村の人が用意してくれた小屋に戻つたが、今日は仕事をしていなかつた為、食事はもらえなかつた……これは楽しくない。

## 第02話 初めての必殺技

「へへりえ、イノシシ…………」

空高く飛び上がる。ぶつかりかけ怖いー。

しかしこれは様式美ー。

飛び上がった空高く、斧を両手で頭上に持ち上げ、そして

「マキ新割りいこいー…………」

空中より獲物を田掛け、急降下！

「ダイナミックウーーーーーー！」

『マキ割りダイナミック』

命中！　轟音を轟かせ、地面深くに斧が突き刺さる。.

そして、肝心のイノシシはといつと……。

何と6歳児の攻撃によつて真つ二つになつてゐる。

どうやって飛び上がつたのか、自分でも判らないところが、かなりミステリーだけど、氣とか魔力とか、そういうつたものを使つているのかもしねえ。

深く考へると、よく判らなくなるので、考へなことにしておけ。

何にせよ、このイノシシを渡せば、ジャガイモのツルを蒸かしたスープが貰える！ やつたね、今日はホームラン！

何か間違つてゐるような気がかなりするけど、今はとにかく、薪割りダイナミックが成功したことで胸が一杯なのだ。

ただ……惜しむいへば、

「へへ、斧が抜けない」

といふことへらうだらうか。

……

そんな訳で、アトラスことアトラ、六歳児です。

前回から、早いことで数週間。

子供といつゝことで、木のクワで畠仕事を勧められていたものの、目的の為に、毎日のように薪割りをしていった結果、何とか、かなりのアビリティポイント（アビリティを手に入れるのに必要なポイント）を手に入れることができて、今の僕の状態はこんな感じになっていたりする。

ジョブ	：農民
Aアビリティ	：農技（薪を割る「LV5」、マキ割ダイナミック「LV3」、死んだ振り「LV5」）
Rアビリティ	：平伏
Sアビリティ	：木こりの心得
Mアビリティ	：山移動

Aアビリティってこののは、アクションアビリティの略で、  
動的な能力のことを言つ。例えばゲームでの攻撃系の必殺技や魔法  
なんかは、

全てがこのアクションアビリティに分類されると言つても良い。

死んだ振りがあるのは……熊とかイノシシとか、亞人ととか、凄いのが一杯居るんだよ、この村の近くの山には。

次に、Rアビリティというのは、リアクションアビリティの略で、動的な能力や行動に対する反応的な能力のことを言つ。例えば、ボールキャッチ、矢避け、カウンターとか、そんな感じの能力のことだね。

そして、Sアビリティだけど、サポートアビリティの略で、これは他のアビリティの強化や補助、さらには肉体 자체を強化したり補助したりといった役割を持っている。木こりの心得というアビリティは、木こりとしての仕事をする時に、必要な知識とかを得られるアビリティということ。

最後に、Mアビリティだけど、これはムーブアビリティの略で、移動の際に反映される能力。といっても、これは殆ど無いから、殆どノータッチになると思つ。

という感じで、覚えた薪を割るで仕事がかなり捌けたので、余った時間で山に入つて、現れたイノシシに薪割りダイナミックをしてみたのだ！

うん、超エグい。

エグいけど、こんな田舎の村だと、動物を捌くのなんて、お馴染みのことである。

日本人としてはどうかといつところだけ、ガリア人としては、それが常識。

だから、真つ一つになってしまったイノシシを、斧で押し折った木の枝の葉っぱに乗せて、木の枝を引っ張ることで、村まで持つて帰ることにした。

「おまえ、どうやってこんなイノシシを真つ一つにしたんだあ？」

「木の枝から斧を落として……」

なんて言い訳をしたりもしたものなの、よくやつたなー」と言われ、芋のツルを拭かしたスープを貰えました。

イノシシ？ 何処に行つたんだうつね？

…………うん、深く考へると色々と面倒だし、考へなことにしておこう。

それにしても。

いやー。マキ割ダイナミックは凄かったなー。

今晩は枕を高くして眠れそだなーと浮かれ氣味に小屋に帰る。

枕とか無いんだけどね。

何にせよ、もつちよつと大きくなつたら、村から出る為に、  
今からいつやってアビリティを手に入れていいこう！

耕す、水をやる、

農作成、なんとなく射る、下手な矢も数射りや当たる  
農業の心得、なんちやつて狩人の心得……と、

全部覚えちやつたら、立派な農民の出来上がりだ！

……あれ、僕つて農民になりたかつたんだっけ。

と、とにかく。マキ割ダイナミックのレベルをもつと上げれば、  
オーラ鬼？とかいうのも狩れて、報奨金がもらえるようになるか  
もしれない。

うん、いつことを考えるのは楽しい！

それで、報奨金を貰う時に、さり気なく、そり、さり気なく、  
握手をすればいいのだ。

そうすれば、新しいジョブを手に入れられるかもしねー！

という訳で、また明日から木こり生活を頑張るつー。

いひして、目的が決まつたので、  
その日は気持ちよく眠りにつくことが出来た。

## 第03話 オーク鬼は群生？

あれから一年。

すっかり逞しくなった（？）僕だけど、新しく判つたことがある。

その解つたことについては、『ジョブセッティング』についてだ。

このジョブセッティングという能力、てっきりファイナルファンタジー タクティクスのジョブエンジシステムそのまんま、かと思ひきや、スキルにはレベルが設定されているものがあり、そういうたスキルの場合は、レベルを上げていくことで、効果や範囲が上がつたりする。

しかも、それだけではなく、そういうたスキルを覚えることで、新しく覚えられるスキルが増えたりすることもあるみたいなんだ。

そう、今の僕は……。

ジョブ ……農民

Aアビリティ：農技

（薪を割る「MAX」、マキ割りダイナミック「MAX」、トマホーク投げ「MAX」、ヨーヨー「MAX」、大木断「MAX」、死んだ振り「MAX」、農作成「MAX」、）

Aアビリティ：なし  
Rアビリティ：平伏  
Sアビリティ：アックスマスター  
Mアビリティ：森移動

という風になつてゐる。

畠仕事関係と、弓関係は修得していないものの、斧使いとしてはかなりパワーアップしたと思う。

という訳で、今日はオーネ鬼を倒しに、村を抜け出したのだ。

そうそう、食事の方だけど、最近は、数日に一回は、狩りで獲つた獲物を渡している御蔭か、  
狩りに出るのも公認になつて、怒られたりすることもないし、  
それに、食事の方もかなり豪勢になつてきたんだ。

そう！

芋のツルをふかしたものから……いもをふかしたものに…

これは凄いことだつたりする。

だつて、然程裕福つてこともないこの村だと、畠の作物は、殆どが税金の為に無くなつてしまうのだから、

僅かに残つた形や出来の悪い芋を、大人でもない僕が食べられるなんて、凄く光栄なことなのだ。

うん、大人達がイノシシを焼いて食べてるのなんて、見た事も無いよね……。

……  
という訳で、更なるステップアップというか、『系統メイジ』をジョブセッティングの『ストック』にする為、やってきました。

オーク鬼の住む森へ！

実は、マキ割ダイナミックは、かなり隙が多い。大物相手の大技と「こう感じで、イノシシにすら避けられて、死んだ振りでお茶を濁したことは、数知れない。

そりやー、空高く飛び上がって、落下の勢いで相手を真つ一つにする技だから、例えば人間相手にやつたら、ものすっごい確率で避けられてしまうのも仕方ない。  
といえば仕方ないだろ？

となれば、マキ割ダイナミックでオーク鬼狩るのは難しいかもしない。  
ということになる。

だけど、今の僕には、新しく覚えた技がある。

その一つである『トマホーク投げ』だが、これは、名前の通り、斧をトマホークのように投げて、相手に攻撃をする。遠距離用の技だ。

当然ながら、斧は戻つてこないので、これまた、避けられるとやらめつたら困つてしまつ。

ところで、これを使つつもりといつてこの訳ではない。

そう、本命の技は『ヨーヨー』といつて。

これは、斧をトマホーク投げのように投げた際、何故か……戻つてくるのだ。ヨーヨーの如く……。

ぶつちやけ在りえない。なんてちょっとと思つたけど、まあ戻つてくるんだからいいかと思つことにした。

ちなみに、早すぎて戻つてきた斧を受けられない、なんてこともなく、何故か普通にキャッチ出来たりする。

そんな訳で、今日のオーク鬼退治では、『ヨーヨー』を活用して、オーク鬼を倒すことに決めている。

レベルは既にMAXなので、投げている僕にも、何でこんな速度で飛んでるの？ 在り得なく無い？ まあ便利だからいつか。と思うような速度で飛ぶので、威力的には申し分ない。

さあ来いオーク鬼！ メイジをストックする足がかりにしてやる！

オーク鬼Aが現れた。

オーク鬼Bが現れた。

オーク鬼Cが現れた。

オーク鬼Dが現れた。

オーク鬼Eが現れた。

オーク鬼達はこちらに気が付いていない。どうしますか？

「……」

「く〔逃げる〕」

「はあ、はあ、はあ」

ま、まさか、オーク鬼があんなに群れで行動するなんて……。オーケー鬼というものについても、村の人の会話から知った程度にしか知らないかったので、こんなことになってしまった。

とはいって、オーケー鬼が常に集団で行動するとも限らない。

例えば、さつきのオーケー鬼の集団だつて……。

「あ、オレちょっとトイレ行つとけよなつプー」

「んだよ、出かける前に行つとけよなつプー」

「やだプー、レディの前で下品極まりないプー」

「でへへ、すまんすまんプー」

そう言つて、群れを抜け出すオーケー鬼A。オーケー鬼Aは、集団か

ら離れ、一人森の奥へと入つていく。

「全く、昨日は天然もののワインを飲みすぎたツブー。

「おまえの運氣でアーティストになれるか……」「誰が？」

「オーク鬼よ、貴様に恨みは無いが、十エキューの為に、そしてメイジのストックの為に……。

ここで逝け！」

その言葉と共に、アトラは両手で斧を持ち、振り被りながら、その言葉を宣言する！

Γ Γ Π-Π-Γ ... .

その言葉と共に放たれた斧は、通常ではありえないような加速、回転速度の増加を経て、

風を切り裂くか如く、銳い音と共に、オーデ鬼の胸へと吸い込まれていく！

轟音！！！！

「ブギヤツ」

凄まじい音と共に、オーク鬼の巨体が揺らぐ。そして……。

「ブ、ッパー……。せめて、最後にトイレがしたかった……パー」

僅かな音を立てて、オーク鬼はその場に崩れ落ちた。

「トエキューを手に入れた。メイジをストックした」

……

…… という風になつてもおかしくないと思つんだよね。

問題は、オークがトイレに行く為に、わざわざ集団を離れるのがどうかってことだけ……。

……無理な気がする。

う、うん。まあこれはどうでもいいか。どっちみち、群れからはぐれていればいいんだし、別にその理由がトイレじゃなくてもね。

よし。適当に隠れつつ、森の中を探して、群れからはぐれているオーク鬼を見つけたら、不意打ちで襲い掛かる。

そう考えて、森の奥へと、再び入つていった。

.....

それは、森の中を、群れからはぐれたオーク鬼を探して、探索している途中のことだつた。

オーク鬼の群れ自体は、割とよく発見することが出来た。

それもその筈。どうやらこの森はオーク鬼達の住処になつてているようなのだ。

斧を持つたオーク鬼や、鉈を持ったオーク鬼の姿がかなり見られる。ゼロの使い魔のオーク鬼つてこんなのだつたのかな？ うん、まあいいか。

それよりも単独行動をしているオーク鬼を探さないと……。

そう考えつつ、僕は慎重に探索を続けていたんだけど……。

爆音。

轟音。

爆音――――

突如として鳴り響いた音の嵐！

耳がおかしくなりそうな程の轟音が、森の奥より鳴り響いている。

僕みたいな低い視点からでも、森の奥に、煙が上がるのが見える。

何が起こっているのか？

全然解らなかつたけど、こんな音や煙は、爆弾を使うか、……魔法を使うかでもしなければ、まず鳴り響くはずがない！

そう思つた僕は、思いっきり駆け出した！

そして走つてみると、

何故か、森の中を、僕とは逆方向へと走りぬけるオーク鬼達が居るけど、無視。

オーク鬼達は、僕なんかには構つていられないらしく、一目散に走つていく。

もしかしたら、この爆音を発生させている主から、逃げているのかもしれない。

何となくだけひつひつ思つた。

「」の轟音の発生源。そこに居るのが何なのは判らない。  
もしかしたら、すこしく危険かもしない。死ぬかもしない。何が  
起るのかさっぱり判らない！

だけど、走る…

「」の轟音の発生源……。そこは、何かすこし「」のが居るはずだか  
ら…

それが、凄く楽しみだから……！

## 第03話 オーク鬼は群生？（後書き）

やはり三人称にするべきでしょつか。  
この主人公、細かいことは考えないという設定のおかげで、  
考察というものをし難いのです。うーん。

## 第04話 次元違いの戦い（前書き）

今回は三人称になっています。

## 第04話 次元違いの戦い

耳がおかしくなる程の爆音、轟音！　轟音！　轟音！　止まない轟音の波！

世界の果てまでも埋め尽くしているかのように錯覚してしまつ程の音の中心。

そこに、一対の存在が居た。

片方は、巨大な体躯。明らかに人間にあるまじき肌の色。その色は濃い緑色をしており、巨大な兜を被り、不思議な装束に身を包んでおり、手には巨大なる斧。

そして、巨大と称したその体躯たるや、立ち並ぶ森の木々の頂点にすら迫らんとしている程……。

数字で表すとすれば、三メートルは越しているだろつか……この世界だと、三百サント、三メイルになるのか。

その存在……を見たアトラの思考は、一瞬、完全に停止していた。

なぜならば、その巨漢。その顔形や造形そのものにこそ、見覚えは無かつたが、その格好、様相、それに見覚えがあつたのだ。

アトラの記憶の中についたその存在。それは、オークを統べる王たるもの……。

それは、アトラが前世でプレーしたゲーム。その中にだけ登場した存在である筈なのだ。

だからこそ、格好にこそ見覚えはあっても、CGと現実の違いから、造形に見覚えがあるという認識にはならなかつた。

それでも、アトラには、その存在を称する名称は、ただの一つしか思い浮かばなかつた。

その名前は……『オークヒーロー』。

オンラインゲームである、Ragnarok onlineに登場するボスの一體にして、強力な力を持つたモンスターである。

そして、本来ならゲームの中では、初期の頃ならばいざ知らず、最近では一人で太刀打ち出来るような存在ではない（多分）。だというのに、その“男”は、一人で、人の身を遥かに超す巨大な体躯を持つ、オーケヒーローを相手に、戦いを繰り広げていた！

巨大なる体躯を持つたオーケヒーローに対し、男の身長は、せいぜいが170サントと言つた所だらう。

その体格差たるや、ただでさえ圧倒的なものだといつのに、オーケヒーローが手に持つ、

巨大なる斧のせいで、余計に際立つて見える。

赤子と大人でも、ここまで圧倒的な差としては見えないだらう。

だというのに、男は一步も引かず。荒れ狂う攻撃の嵐を、避け続

けている！

オークヒーローが放つ一撃！

巨大な斧をオーケヒーローが振るうと共に、巨大な雷の嵐が荒れ狂う！

その余波が森に火をつける！ 地を焦がし、大地を揺るがす！

先住魔法というべきか、オーケヒーローの放った雷、それこそは

#### 『サンダーストーム』

それは巨大なる雷の嵐を呼び込み、大勢の相手を一瞬にして黒こげにしてしまうという程の魔法。

それをオーケヒーローは斧を振るうだけで発動しているのだ！

恐らくは、アトラが聞いた落雷の音は、この魔法だったのだろう。

アトラ自身も、そう思いかけていたのだが……。

違う。

オーケヒーローの振り下ろした斧！

その斧が大地を穿つた瞬間！ 卷き起こる爆発と、鳴り響く轟音！

オークヒーローが地を叩いただけで、地面が揺らぎ、大気が揺れる！

人の身では、たったオークヒーローの一撃、斧だろうが、雷だろうが、どちらであろうとも、掠つただけでも、致命傷となるだろう！

しかし、それを男は避け続けて、空を翔ける！

文字通りに、空を蹴って、避ける！ 避ける！ 避ける！

そして、避けて避けて逃げた先……！ 空中高く、オークヒーローの斧が届かないほどに、離れた距離にて、放つ魔法……！

「…………（凍土に漂う氷竜よ）」

男の、アトラの耳では聞き取れない不思議な言語。その言語で紡がれるもの。

その言葉と共に、眼に見えない何かが、男へと集まっていく。それは、魔法を使えない、魔法を知らない、アトラにすらも、明らか

かに違和感を感じさせる光景。

そして、集まつた何かは、大氣を震えさせる。まるで、男の意思に従つよつて。

荒れ狂う波、しかしそれは眼に見えず。

オークヒーローは届かぬ相手に、雷を落とすつと斧を振り上げ……！

「……………（その冷たき眼差しで此岸を哀れ  
め）」

しかし、その直前、詠唱は完了した……！

「『ホワイト//ゴート』……！」

白、白、白、白。視界を埋め尽くすは白！

世界の全てを白に染めるかのよつな、圧倒的なその白い全て、その全ですが、

男の手の動きに合わせ、一点へと収束していく！

そして……！

収束した先、その先で、オークヒーローは、斧を振り下ろしかけたその姿勢。

その姿勢のままに、凍結していた。

天まで届くかのような氷の柱。その柱の中央、そこに“それ”は存在していた。

凍結し、彫像のように動かないオークヒーロー。

その姿を見て、よつやく男は息を吐く。

改めて容姿を見れば、金色の髪に、不思議な緑のローブを着た男。

男は、中空から降り立ち、地面に落ちている荷物のようなものを拾い集める。

その様子から、それらが男の持ち物であることが伺える。

……そして、それを見ていて、やつとアトラは正気を取り戻した。

魅入られていた。男とオークヒーローの戦いに。

やはり走つても来て正解だつたと、そう思い……。気が付いた。

男と握手をすればいいのではないかと?

男が扱う魔法には、どこかで見覚えがあつたが、とりあえず、ハルケギニアの魔法ではないことは確かだ。

とすれば、今を逃せば、男の“ジョブ”を手に入れることは出来ないかもしない。

そう考えて、歩き出さうとした瞬間……。

見た。

男の後ろ、その後ろに存在する氷の柱が、“揺れた”的を。

男は、荷物を拾い集めるのに夢中で、後ろの柱が揺れたことに気づく筈が無い……！

よりにもよって、オークヒーローは、斧を振り下ろしかけた姿勢で停止しているのだ！

振り下ろした瞬間、男の身体へと、雷の嵐が降り注ぐだろう。

間に合わせる為には……これしかない！

アトラは、思いつきり、両手で斧を後方へと振り被り……そして

……！

『『トマホーク投げ』……！』

戻ることを考えない飛ばせば終わりの一撃！しかし、だからこそ、『『トマホーク』よりも威力は高い。

その一撃を、アトラの持てる全力！　その全力で、オークヒーローを田掛けて飛ばした！

相手は動かぬ！

トマホーク投げのレベルはMAX！

そして、アトラが投げはなつた斧は、風を切り、空を切り、その切り裂く音をすら置き去りに、凄まじい速度で回転しながら飛び……！

「……！」

その飛来に気付いた男が、咄嗟に身を屈めるその横を通り越し……！

轟音！

轟音！

轟音！

大地を揺るがす音を立て、氷の柱が地に落ちる！

それと同時に、斧を、深々と、その身に突き立てられたオークヒーローが、音にならない叫びを上げる！

その叫びを聞いて、ようやく状況に気付いた男は、地面を蹴りながら、身体を後方へと振り返らせた。

痛みにもがき苦しむオークヒーロー。

それを見据え……男は、空へと翔け上がる。

そして、再び空高く。男は……魔法を唱え始めた。

「…………（天驅ける光竜の御力を借り）」

再び、聞き取れない言葉で紡がれる詠唱。

それと共に、やはり、見えない何かが、途方も無い量、男へと集まつていく。

その量たるや、先程の魔法を放った時。その時よりも更に多い。

アトラは、身を震わせ、近くの木々に手を回した。不安。怯え、そして期待。

「…………！（星々を大地に落とさん……）」

その巨大なる魔力。それを集めて、男は言の葉に意思を乗せ、呪文を詠唱する。

一言一句。先程とは違い、ゆっくりと詠唱されていくそれは、まるで言葉自体に魔力が籠っているかのようだった。

そして、男は、片手を下ろし、指を、……地面でもがくオーケヒ一口一へと向けて……。

「『メテオストライク』……」

瞬間、空が消えた。

暗い闇の中に輝いていた星星の輝き、そして一つとなつた月が照らしていたはずの空が、

……消えた。

あるいは黒。

何処か、どこかも解らない場所。

やつ、その黒は宇宙……。その宇宙より飛来するもの……。

それは即ち、隕石と呼ばれるものだ。

ゲートを繋げるにより、宇宙の彼方より、流れ行く星を、  
四

大なる飛礫と変えて対象へと叩きつける。  
最大の魔法……それが。

### 『メテオストライク』

降り注ぐ！

大きな穴を穿たれて、その穴より、鱗割れて亀裂を作り、当然の  
如く地面が揺れ、  
更には巻き込まれた木々が倒れしていく。

圧倒的な質量。

次々と飛来する“それ”は、如何なる防御も意味を持たない。

轟音！　轟音！　轟音！　轟音！　轟音！　轟音！　！　！

地形が変わりかねないようなその魔法に、視界が歪む。立つていることすらも難しい。それでも、地面を転がつてしまえば、どこへ行くとも知れないとばかり、アトラは木を必死で掲げる。斧がないせいで、その身体能力は、かなり落ちてしまっている。耐えられない。

もしも魔法に巻き込まれれば……間違いなく死ぬ。それは楽しくないばかり、ふんばるアトラ……。

しかし、その思いも虚しく、アトラが掲んでいる木も、圧し折れ……そして……！

アトラは、空を飛んでいた。

アトラはメイジではない。平民である。ゆえに、空を飛ぶのは、メイジの力を手に入れなければ、不可能な筈だつた。

だとこりのに、アトラは空を飛んでいた。

それもそのはず、これは自分の力で、ではない。

「……すまない。君のおかげで助かったよ

それは、オーケヒーローと戦っていた男。

彼の腕に抱かれ、アトラは……ハルケギニアの空を……飛んでいた。

## 第04話 次元違ひの戦い（後書き）

いきなりやつちやつた感で一杯という感じですね。

いきなりクロス。しかもクロス先は一部に不評な R a g n a r o k  
nineと、

あれですね。

本当はショットページを手に入れて、アビリティを少しずつ覚え  
ていく展開にしようと思ったのですが、  
何故か気が付いたら書いていました。何ででしょう……。

## 第05話 未知との遭遇

アトラは困っていた。

かなり、という程ではないにしても、困っていた。

何故か……。

それは、本日の脇過ぎのこと、アトラはオーク鬼を討伐して首を獲る為に、

比較的近くの、オーク鬼が住むという森の中へと入ったのだ。

そして、オーク鬼が群生であることを知り、群れよりはぐれたオーク鬼は居ないものかと、

探して彷徨う内、耳を壊しかねないような轟音を聞き、

何か面白いことが起こっているのかもしれないと考え、轟音鳴り響く、その先へと駆けつけた。

そこで見かけた光景。

それは、空想の産物だつた筈の、オークの王者。オークヒーローと、そして、一人の男が、戦っているというもの。

アトラの常識を超えた戦い。

オークヒーローが振るだけで鳴り響く轟音、落ちる落雷。

男が紡ぐ詠唱。

身を震わせるような、何かの収束。

そして……詠唱の終わりと共に、

全てを凍りつかせんばかりに視界を染めた白。

そして出来上がったのは、オークヒーローを閉じ込める氷の柱。勝負を終わったと見た男が見せた隙に、襲い掛からんとするオーケーロー。それに気付いたアトラが放つた『トマホーク投げ』。

命中し、氷の柱は轟音と共に崩れ落ちた。

そして、オーケーローの存命に気付いた男が、改めて放つた魔法。

それは、隕石を召喚し、敵を粉微塵へと打ち碎く魔法だった。

その魔法の範囲は凄まじく。

離れた場所から観戦していたアトラすらも、巻き込もうとその手を伸ばした。

しかし、それを救つたのは……隕石を呼び寄せた男、だった。

男に抱えられ、空を飛ぶアトラが見たのは、いくつもの巨大なクレーターが出来上がりしていく光景。

そして、全てが終わった後、いくつものクレーターを残し、黒い空は消え、再び、一つの月と、星々が瞬く、元通りの空へと戻った。

残されたクレーターの、最も巨大な穴が穿たれた場所。

そこには既に、オーパーハーローという存在は居ない、最早完全に粉微塵となってしまったのだ。

そして、それはつまり……

「ほぐのあいほうがつ！」

アトラが投げつけた斧、それも木つ端微塵になってしまったといふことに……。

急に奇声を上げたアトラに、びっくりしながらも、男はアトラを地へと下ろした。

そして、男と軽い自己紹介を交わした後に、事情を聞かれ、アトラは、投げた斧が木つ端微塵になってしまったただひとつ、そしてこのままだと物凄く困ることを告げた。

やつ、あの斧が無いと、明日からの狩りが難しくなつてしまつた。  
当然ながら、斧が無くなつたから頂戴。なんてことは不可能である。

これには楽天的とも言えるアトラとこえどもショックが隠せない。

血口紹介で判つた名前はエリックであった。

彼は、アトラの事情を聞いて、申し訳無さそうな顔をしながら、どうしたものかと悩んでいたようだつた。

何しろ、自分が苦戦させられたオークヒーローを子供でありながら、

悶絶させるような一撃を為せたのだから、  
さぞかし高級な斧だつたのだろうと考えているのだ。

アトラが、仕事で使う斧とだけ言つたので、起じつた勘違いといふものである。

という説で、いつの間にか、悩んでいたのはアトラから、エリックへビバントンタッチをしていった。

ところも、他人が自分の為に悩みに悩む、その光景を見ている  
と、  
悪いことしたなーと思うと共に、段々斧のことは、まあなんとかなるかな。と忘却の彼方へ消えていったのだ。  
アトラは、楽天的というよりも、頭がアレなのかもしけない。

何にせよ、思考を切り替えたアトラは、エリックと、どうにかして握手出来ないものかと考えていた。

あれ程の魔法を連発していたのだから、凄いジョブに違いない……といったところだ。

……

とはいって、これだけ申し訳なさそうな顔をしているのだから、握手しようときなり言い出したとしても、

「我が家には、見知らぬ人と握手をしてはいけないという家訓が……」

とこうことでも無い限り、何とかなるんじゃないだろうかと、アトラは結論付ける。

とこうことにで……。

「あ、良かったら握手とかどうですか？」

と囁いてみたのだが……。

……居なかつた。

何故か、目の前で悩んでいた筈のヒロックは、その姿を消していった。

逃げられた！？ 握手恐怖症？

とばかり、驚いて辺りを見渡すアトラ。

そして、探し出してすぐに、エリックの姿を発見する」ことが出来た。

ホツと胸を一撫でして、改めて確認すると、

そこはアトラの位置から簡単に見下ろせる位置……。

そう、エリックは、何やらクレーターの中心地點にて、何かをしているように見える。

まだ握手チャンスはある！

そう考えたアトラは、クレーターの中心地點へと向かって……。

降りよう、と思ったのだが、とっても深かつたので、男が戻つてくるのを待つことにした。

そして、戻ってきたエリック。

エリックの手には、白い十字の形をした斧が握られていた。

奇しくも、それはオークヒーローが手に持っていた巨大な巨大な斧と同じ形をしているのだが、

あまりにもあんまりな程に、大きさがあまりに違います。

現在も、エリックの身体からすると、やや大きく見えるが、少なくともオークヒーローが握っていた大きさとは違います。

あのクレーターの中で無事だったことも驚きだが、それ以上に驚きなのは、やはり大きさだろう。

……縮んだのかな？ アトラがそう考へていると……。

エリックはおもむろに、白い十字斧を両手で持ち、アトラへと向けて差し出した。

それに首を傾げながらも、当然の如く、アトラはその差し出された手を握り締める。

「何をしているんだい？」

「え？ 握手をしたいのかと思いまして……」

急に握手をされたことから、どうこうとかと不思議そうな表情をするエリックだったが、アトラは気にせず満面の笑みを浮かべながら、手を握り続けていく。

もちろん、何故かしっかりと右手と右手で握手する形で。

「いや、これを売れば、君の仕事に使っていたといつ斧の代わりへらには買えるかと思つたんだが……」

「あ、そういうことですか！」

「ありがとうございます。じゃあ、この斧を薪割りに使わせてもらいますね？」

「薪割り！？…………」の歎で木こりの仕事をするのかい？ そりか  
い…………そりなのかい…………いや、いいけどね。

…………といひや、どひつて手を離さないのかな？」

木こりの斧でオークヒーローを悶絶させたこと、そして木こりに  
見るからに強力な、  
十字の斧を使おうといつアトヲの言葉に、  
どこか達観したような表情を浮かべたヒリックだったが、  
改めていつまで握手をしているのかと、アトヲに問いかけた。

「いえ、握手は10秒以上はしないとダメって言いますから」

ジコブセッティング的には間違いではないので、アトヲの能力を  
発動させる為には、  
確かに10秒以上しないとダメなのは確かである。

「この地方ではそりいつものなのか……」

当然そんな筈が無い。そして、もう既に10秒が経過したらしげ。  
それを裏付けるように、アトヲの意識内に……。

ジコブ

『無職』 [L>·]

『農民』 [L>4]

## 『ウォーロック』「ルヴォ」

新たなるジョブの登録が完了したことなどを告げる。  
チャイムのような音が鳴り響いた。

そして、記載された新たなる職業の名前は、ウォーロック。

ウォーロック。その名前は……アトラにも聞き覚えがあるものだつた……。

そう、タクティカルなミニューレーションゲームのあれである。

新しいジョブに感無量といったところのアトラだが、  
そんなアトラに、ヒリックは問い合わせて来た。

「それで、実は尋ねたいことがあるんだけど、構わないかい？」

「はい。大丈夫ですよ」

とりあえず、ウォーロックについて確認するのは後にならう。  
と

「……あーっと」

流石にこれには、アトラも何とも言えない感情を抱いてしまう。  
なぜなら、恐らくヒリックは、ハルケギニアに来たばかり……なの

だから。

「……はガリアといつ國の南東の方の田舎から数千メイルくらい離れた森……、になるのかな……」

「ガリア？ ビニだい、そーは？」

「ガリアはハルケギニアでは大国の名前です。  
他にはトリステイン、アルビオン、ゲルマニア、ロマリア……と  
いうのがハルケギニアの國の全てになります」

Hリックの置かれた状況は、アトラには既に判つてゐることではあるのだが、  
転生云々になると、信憑性はかなり低くなる。  
その為、いついた遠まわしな言い方で判つてもらうしかない。

にしても、どうしてHリックは言葉が通じるのか、不思議なことである。

と、あつさう横道に思考が逸れてしまつたアトラだったが……。

「……トリステイン？ アルビオン……ゲルマニア？ ビニも聞き覚えが無い……」

当然ながら、Hリックには、どの國の名前も、聞き覚えが無いらしい。

一体どういった事情で、Hリックはこの世界に来てしまつたのか……。

「あの、『じりじり』に来たんですか？」

その言葉に、頭を抱え出したヒリックが、ピクッと反応した。

「『じり……やつて？』

アトリーの言葉を繰り返す。

「やうだ。あの悪夢のよひな宮殿から、よひやへ歸還出来ると思つて、門を潜つたら……」

「潜つたら……？」

「あの巨大なモンスターが現れたんだ……」

「『じり……ですか』

門、ところはアトリーにも判らなかつたが、恐らくは死者の宮殿だろう場所からの出口とは違つたものだつたのだろう。しかし、だとすれば……。

「だつたら、よくはわかりませんけど、もう一度門ところのを潜れば、帰れると思いますよ。

その門を出た場所は、『じりだつたんですか？』

やう問い合わせた。言つても門がある訳がないと思つて、発言をしているのではない。

アトリーは、本気で探せば門が見つかるんじゃないかと思つているのだ。

まさしく樂天家である。

しかし、そんな言葉でも、エリックにはかなりの慰めになつたらしく……。

「そう、だね。門を探してみよつ……色々とすまなかつたね」

そう言つて立ち去りひといするエリックを、アトラは咄嗟に伸ばした手で押し留め。

「僕も手伝いますよ」

そう言つて、一コリと笑つて見せた。

……ちなみに、十字の斧こと、ライトエプシロンは、アトラが持つても縮むことは無く、かなり重たかった。

もしかすると、持ち主と認めた人間に合わせてサイズが変化するのかもしれない、エリックが意見し、そういうえば基本レベルが44くらい無いと装備出来ない武器だったつけ……とばかり、納得したのだった。

とはいって、一応アックスマスターのおかげか、持つことくらいは出来るようだつたが……。

## 第06話 魔法……それは憧れ

「これが……。門なんですか？」

驚いたことに、門はあつわつと見つかった。

門から出てきた場所。まさしくそこには変わらずに存在していたのだ……。

といつても、エリックの言葉での門とは異なった印象を抱かざるを得なかつたが……。

というのも、“それ”は……“黒い孔”にしか見えなかつたからだ。

しかも、その“黒い孔”は、まるで、絵に描いたように立体感が見えず、入ることが可能かすらも判らない。

だが、エリックはその孔を見つけて驚きの次には喜んでいた。  
間違つては居ないということだ。

「良かつた……これで帰ることが出来る

「わづ……ですかね」

しかし、本当にこの“黒い孔”が、エリックの望む場所……ヴァレリア島のどこかに繋がっているのだろうか?

ふと持ち上がる疑問。

もしかすると、この黒い孔の先は、どとかの階で、エリックさん

が孔から出ると、突如背後が何故か爆発して、

結果として黒い髪の兄妹が揃って助かつたりするかも知れない。

あるいは、この黒い孔の先は、どこかの貝殻をくりぬいたような家々が並ぶ都の奥の祭壇の上層部で、なっかい刀を持って、下に居る女性に向かつてダイブを決め込もうとしているロングな男性の正面に現れるかもしれないし、

はたまた、出た先は岩の中で、身動きすらとれない可能性すらあり得るのでは「いしのなかにいる」なんてことないだろ？

などといふことを考えて、少し苦笑いを浮かべていると、エリックが怪訝な顔をしていた。

それは、田の前で急ににやけ出したら、怪しく思つても仕方が無いだろう。

「どうしたんだい？」

「いやー。本当に見つかって良かったなって思つて

「やうか……本当にありがと、君の心遣いには感謝の気持ちで一杯だよ」

何とも言えないような表情を浮かべるエリック、だが。

「いえ、いいですよ。ほら、早く入らないと消えちゃいますよ」

確かに、黒い孔がいつまで開いているとも判らない現状、早く入るに越したことはない。

決して、ストックしたジョブの能力を確かめたいとか、  
エリックが石の中に転移しないものか、なんてことは考えていない。

純粹に心配しているのだ。おわりへ、多分。

「やう、だね。

ありがとう……。これはお礼だよ。受け取ってくれ

り出し、  
アトラへと手渡して来た。

「え？ お礼……いや、お礼はもう十分受け取りましたよ」

「いや、受け取つてくれないかい？  
オーラヒーローだつたか……。あのモンスターから助けてもらつ  
たこともやうだし、

君は、諦めていた僕を勇気付けてくれて、更には一緒に門を探そ  
うと言つてくれた。

これを受け取つてもらえなかつたら、自分で自分が嫌になつてしま  
いやうなんだ」

やう言つて苦笑するエリック。

「やうですか……。じゃあもうこりますね」

エリックの発言に、少し罪悪感を感じないでもなかつたが、もら  
えるものはもらつておくべきなので、  
あつやりと方向転換をして受け取るアトラ。

この宝石が呪いのルビーでないことを祈るばかりだつたが、

呪いのルビーだらうが何だらうが、旅に出る時の種銭が出来たとばかり、喜んで受け取るアトラだった。

……

「それじゃあ。本当にありがとつ……アトラ君」

「いえ、氣をつけて下さー。またこんなとこに来る」とが無いよ  
うだ……」

「ははは。やうだね。氣をつかむとじょん。では、な

「はい、それじゃあ……」

手を振り、去っていくエリック。

エリックは……。あつたりと“黒い孔”に飲まれ、姿を消した。

本当に、無事に戻れていれば良いんだけど……。まあ大丈夫かな。  
と、親切にされたこともあるのか、アトラにしては、眞面目に考え  
ていた。

「セーで。それじゃあ、ひつすべウォーロックのアビリティを見て  
みようかな」

その真面目さは全く続かなかつたが……。やはり、アトラにしては、の真面目さだったらしい。

何はともあれ、アトラは、自分の左手と、右手を繋ぎ合わせる。

……すると、意識下に、浮かぶもの。

「↙「ジョブ確認」「ウォーロック」

意識下の操作を終えると同時、浮かび上がる情報。

ウォーロック

「古代の言語に精通し、古代の書物や、教典の解読に尽力する研究家。学者と呼ぶに相応しい魔法使い。

人形使いでもあり、ゴーレムの力を強化する特殊能力を持つ」

「様々な書物を解読、記憶するが、もしくは戦闘経験を積むことでレベルを上げることが可能」

アクションアビリティ

竜言語魔法

✗アニヒレー・ション 「ジョブレベルが足りません」

(竜言語魔法。炎の雨を呼ぶ)

✗マーティライズ 「ジョブレベルが足りません」

(竜言語魔法。術者の命を犠牲にして死者の魂を呼び戻す。肉体無き者の復活は不可能)

✗フォースエンス

「ジョブレベルが足りません」

(相手の弱点となる属性の刃を形成する)

### リアクションアビリティ

#### 質疑応答

(質問をされた時に、質問された内容に対し、数時間かけて返答するアビリティ)

### サポートアビリティ

#### ゴーレム強化

(ゴーレムを使役した際や、味方の使役するゴーレムの能力が上昇する)

### 言語理解

(如何なる言語であれとも、そこには意思を感じられれば、理解することが出来る。つまり魔法の一種)

### ムーブアビリティ

#### 空中歩行

「ウイニングリング ウイニングブーツ ア

イテムがあります」

(道を歩き、階段を昇り降りするかのように、空中を歩行することが出来る)

「何とも、凄いというか、アクションアビリティは、現状では一つも使えない有様だったが……。

「うん、とりあえず。死者を蘇生したら自分が死ぬことはわかった

アトラからすると、何とも微妙な効果の魔法であるマーティライ

ズ。

しかし、何となくだが、このマーティライズを修得すれば、タクト

イクスオウガというゲームで、

最大の裏技ともいえるものの一角である。“あの”魔法が姿を現すような気がしていた。

系統的には近いものがあるといつのも、その思考に拍車をかけている。

ところで、実はアトラは、ゼロの使い魔といつ物語については、殆ど覚えていなかったりする。

印象的な部分をいくつか覚えていろくらいいだ。  
羅列してみると……。

- ・ルイズがサイト召喚。
- ・サイトがラッキースケベを連発。
- ・怒ったルイズがサイトを鞭で調教。
- ・ゾンビパニック。操られたゾンビ達が女王を攫う。
- ・マリコルヌはマゾ。

なんとも難儀な場所ばかり覚えている気がするが  
それでも、ゾンビが大量発生するイベントがあったことは、印象的  
だつた為に覚えている中に入っている。

そして、“あの”魔法があれば、このゾンビの大量発生が面白い  
イベントに変えられるに違いない。そう思っているのだ。

「しかし竜言語魔法かー、スナップドラゴンとか、かなり黒い魔法  
だつたよな……。まあいつか

スナップドラゴンといつのは、前述の通り、術者を剣に変える魔  
法であり、

その術者のステータス状態によって、剣の性能が変わるという能力を持つていた為、強く成長させたキャラクターを犠牲にして剣を手に入れるというものであった。

現在は表示されていなかつたことを考へると、ジョブレベルが上がるか、他のアビリティを覚えれば浮かび上がるのかもしれない。使つたら人生終わつて剣生の始まりだが、

「アビリティポイントは農民とは違つて、戦闘でもしないと上がらないんだなー。まー狩りでもしてれば上がるのかな?」

とりあえず、適当にやつていけば大丈夫だろつと思いつつ、ジョブチエングを決行することにした。

「↙「ジョブチエング」「ウォーロック」

カチリと、何かがはまつたような不思議な感覚。

理屈ではなく判る。

ウォーロックといふ職業に、転職したといふことが……。

そして、意識下で、現在のアビリティをセッティングすることが出来る状態へと以降する。

まるで、ゲームのバイスプレイが頭の中に入り込んできたような不思議な状態。

その状態下で……アビリティをセットしていく。

ジョブ	：ウォーロック
Aアビリティ	：竜言語魔法
Aアビリティ	：農技（省略）
Rアビリティ	：平伏
Sアビリティ	：アツクスマスター
Mアビリティ	：森移動

「ふう……」

……そして、全てをセシートし終えて、改めて自分の状態を認識することが出来た。

ウォーロックになつたことによる変化……。

「あれ……？」

そう、アトラは、転職することによって気が付いたことがあった。それは、身体が、物凄く軽くなっていること。

恐らくは、農民とウォーロックといつ職業の違いなのだろうが、木こり仕事をする分にも、おそらくはこの方が都合が良いだろうと考える。

実際はそんなことは無いのだが（本職じゃないので）、ともあれ、転職し立てで気分の高揚しているアトラには、判るはずもない。

そして、転職したところで、改めてウォーロックの、修得可能なアビリティを確認していくと……。

必要なアビリティポイントが、大魔法はやたらめったらに多い。  
それは、農民で一つのアアビリティを10……つまりMAXまで上げるのに必要なアビリティポイントよりも更に多くのもの。  
しかも、更に言えば、ジョブレベルが足りないとやらで、アビリティポイントがあつたとしても、未だ覚えることは出来ない。  
これでは、大魔法を連発するのは、遙か先になつてしまいそうだと、  
がっかりするところなのだが……。

「やっぱりくじりしきり上がり上げるのが基本だよね」

アトヲは、普通に楽天的だった。  
ちよつとくじりい悩んで欲しいものだが……。

とつあえず、アトヲとしては、アビリティポイントならば、  
うやむやになつてしまつたオークを討伐して、報奨金をもらつたり  
といふことをしていれば、  
その内に貯まるだらうと考えている。  
やうなると、今度こそ、この世界の魔法使いの魔法を修得できる  
筈、と  
考えるだけで、樂しくなつてくるのを感じていた。

魔法は憧れといつてもいよいよなものだから。

とはいへ……このまま、オークを討伐に行く訳にもいかない。  
既に辺りは完全に真っ暗どころか、朝日が差して来ているのだから  
……。

「とりあえず今日は帰らないとな~」

オークの森を抜けて、家に帰らなくてはいけない。

……オーク達は逃げに逃げて、森から出て行った……。なんてことになつていれば安心なのだが、

もしも、戦いの音が止んでいることに気が付いて、戻つてきいたら?

……何とも、大変そうな道のりだつた。

「まあ、何とかなるかな」

とりあえず、歩き出さないと始まらないとばかり、アトラは、巨  
大な十字の斧を肩に担ぎ、森へと向かつて歩き出した。

そして、立ち去るアトラの背後には、既に“黒い孔”は存在して  
いなかつた。

## 第06話 魔法……それは憧れ（後書き）

いきなり凄いチートを出してしまいました。  
とはいって、感想の方でもらったアイディアの通りに、  
当分使えないようにしておく予定です。

## 第07話 今度こそのおーク鬼

あれから……数週間余りの時間が流れていた。

アトラは、何とか、群れから離れたオーク鬼を討伐しようと、オーク鬼の森へと入る毎日だったが、まず、その後暫くはオーク鬼達の数がかなり少なくなつていていたように感じられた。

といつても、あの日が初めてだったアトラは、普段がどのくらいか、等ということは判らない為、あくまで、あの日と比べてであるが。

もしかすると、オーク鬼の村がクレーターになってしまったので、再建しようと、補修作業に乗り出していたのかもしれない。

更に、流石にアトラも毎日は出かけられず、イノシシ狩りに出たり、薪を割つたりといつ日々だった。

しかしだ、木こりの仕事や、獣狩りは、かなり困難なものへと変貌してしまっていた。

というのも、アトラが手に入れた十字斧、ライトエブシロンは強力過ぎたのだ。

薪を割れば下の切り株まで、まとめて粉碎し、

イノシシを狩れば、肉片を飛び散らせる……。あまりにも威力があり過ぎる。

ちなみに、流石に慣れていたつもりでも、飛び散った肉片を初めて見た際、吐き気がしたのは言わずともがなであつた。

ともあれ、そのせいで、イモの蒸かしたものすら、殆ど食べれない。

飛び散った肉片を搔き集めて渡しても、村人は嫌な顔をするばかりであるし。

しかも、ライトエプシロンの持つ効果である箸の、ヒールも使用出来ない。

これに関しては、本来のゲームではLV44が装備制限だったことから、振り回すことは出来ても、使い手にはなれないのかもしれないと考えた。

ちなみに気付いたのは飛び散った肉片を繋ぎ合わせられないかと考へてだつたりするのだが。

そんな状況だが、アトラはといえば、毎日振つていればそのうち使えるのでは？ とやはり楽天的に結論付けているのだった。

……

という訳で、今日も今日とて、オーク鬼を狙つて、オーケ鬼が居る森にまでやつて來たアトラだった。

能力は、前回と殆ど変わり無い。

それはそうだろう、モンスターを一体タリとも倒していない上に、農民ではない状態で新割りをしてもアビリティポイントが貯まらないことに気付かなかつたのだから。

その為、数日前には、これからは新割りの前には農民にジョブチエンジして、

サポートアビリティから、アツクスマスターを外して、木こりの心得をセットしようと心に決めたアトラが居たそうな。

さて、現在のアトラだが……。オーク鬼の森を巡回していた。森移動によって、隠れながらの移動なので、オーク鬼にも発見され難い。言つてみれば豚の化け物なので、確実とはいえないが（豚はトリュフを探す際に用いられるくらい鼻が良い）。

しかし、やはり今日も今日とて、一体で居るようなオーク鬼は発見出来ない。見つけても、四体以上で集団行動をしているオーク鬼ばかりである。暑苦しいことこの上ない。

とはいって、アトラにも理由があった。アトラは、ジョブセツティングにより、強力な斧の技を持っている。それにより、オーク鬼達の王である、オークヒーローにすら大ダメージを与えることが出来たのだが、あくまで、アトラは攻撃力があるだけ、なのだ。

防御力は紙としか言いよつが無いし。

敏捷性も、ウォーロックの補正のおかげで、大人よりは高いかも？

という程度だ。

これでは、複数を相手取ることは難しい。

一応、ヨーヨーで一体を即殺し、離脱するといつことは出来るものの、これでは証拠となる首が手に入らない。

オーク鬼の懸賞金を貰う為には、証拠として、腕や足とは違い、一

つしかないもの。

つまりオークの首を渡さなければいけないのだ。

『一『一で即殺しようが、首を切り落とす時間なんてあるはずがない。

となれば、アトーラといえども、慎重にならざるをえないのだ。

つまり、こくらアトーラであるうとも、このまま、群れからばぐれ、最低でも一體になるオーク鬼を探すのは当然のことであり、とするべき選択なのだ。

「 もう十分我慢したはず」

そう、とするべき選択だから、アトーラが群れからばぐれたオーク鬼を探すのは当然で……おや？

「 こんなのが全然楽しくないし、そもそも群れ」と突つてもいいと思うんだ」「

……。

「 ょしこりわ」

アトーラは、……どうまでもアトーラだった。

と、とはこゝ。こくらアトーラであるうとも、無策でオークの群れ

に挑む筈が無い。

当然ながら、練りに練つた作戦を用意しているのは当然のことだ。

……

「オーク鬼Aが現れた！」  
「オーク鬼Bが現れた！」  
「オーク鬼Cが現れた！」  
「オーク鬼Dが現れた！」

そして、発見したオークの群れ。アトラの眼前には、オークが四体。

アトラがここ暫くの間に発見した中では、最も少ない数字である。

とはいえ、こちらは一人。

対するは四体“も”居るとも言えるのだから、しつかりと策は用意してある。

「くらえ、『ヨーヨー』！」

と思いきや、木の切れ間から、アトラは躍り出て、いきなり『ヨーヨー』を放った。

アトラの言葉と共に、投げ放たれた十字の斧は、強力な回転と加速をして、オーク鬼へと向かつて飛ぶ！

策……？

そしてそのまま、オーク鬼Bの身体を貫通斜めに切り裂きながら昇り、アトラの元へと高速で飛来し、戻る。

これこそが、ヨーヨーという名称の由来だ。

なぜか、トマホーク投げのように投げた斧が、手元に戻ってくる。かなり便利な技なのだ。というか、戻つてこなかつたら、その時点で武器無しである。

しかも、高速で戻ってきたにも関わらず、アトラはあっさりとキヤッチすることが出来た。

何故あっさりとキヤッチ出来たのか、どじぞの顔に傷を作っていた人も受けるのに長い修行が行つたというのに……。

その理由は簡単。そういう技だからである。

ともあれ、戻ってきた十字の斧を持ち、アトラはそのままに、オーク鬼達に背中を向け、森の中へと走り出した。

オーク鬼Bは、最早、動くことすらもしていない。

「オーク鬼Bを倒した！」

仲間を殺され、頭に血を上らせたオーク鬼達は、当然の如く、猛烈な勢いで、アトラを追いかける。

そして……。

オーク鬼Aが転倒した！

しかも、オーク鬼Aの後に続くように、オーク鬼Dも転倒！

そうなると、残ったオーク鬼Cは、一人でアトラを追いかけることになってしまいます。

オーク鬼といつのは、意外にもドジっ子属性を持っているものなのか！？

当然ながら違う。

実は、これがアトラの策だつたのだ。

わざとポイントをずらして罠を配置して、逃げれば、一体くらいは罠に引っかからずに追いかけてしてくれる。くればいいなあ……。それが、アトラの策。……策？

### 〔罠作成「MAX」〕

LVがMAXになり、強力になつた罠！ そり、その罠とは……。

草の先の部分を結び合わせて作った即席の罠。

簡単に作れる罠でありながら、隠蔽性は高い。引っかかった場合に足が止まるのも、この場合は致命的と言える。

……LVがMAXでこれなのかといふ氣もするが、農民の（なんちやつて）狩人のアビリティなので、こんなものなのだらつ。

ともあれ、アトラは、再び飛び跳ねる。

それを見て、本来ならオーク鬼だらうとも反応くらうはしそうなもの

の  
だ  
が  
。

頭に血が上っている為に、気付けない。

すぐに、オーク鬼Cは転倒してしまい、そして……。

「マキ剛イイイイイイイイ」

空高く、飛び上がり、頭上に斧を両手で掲げるアトラ。

その皿は、一皿を見つめている

即ち、転倒して地に伏しているオバケ鬼の——！

タマカミマモリ

首！

『マキ割ダイナミック』

轍音！

急降下すると共に放たれた一撃が、オーク鬼の頭と胴体を泣き別れさせてしまった。

# 「オーケ鬼Cを倒した！」

当然の如く、噴水のように血飛沫が舞い上がるが、それを避ける  
ように、アトラは転がる首を追いかけ、引つつかむ。  
首を落としたことによる恐怖、気持ち悪さは殆ど感じない。

既に、飛び散るイーリンの肉片で慣れている為だ。

「よし！」

そして、後方を確認。

すると、立ち上がった二体のオーク鬼達が、オーク鬼の現状を見て、激昂、猛烈な勢いでアトラへと駆け出すのが確認出来た。

オーク鬼の首は「」つだけあって、中々に重い。子供のアトラでは、如何にウォーロックというジョブのバッカップがあるうとも、持てるのは一體がせいぜいだらう。

つまり、ここでアトラが取るべき選択は

〔 〔逃げる〕

一択だった。

かくして、オーク鬼の首を掴み、森の中を走るアトラは……。

「やつたー！ これでメイジをストックだー！」

浮かれながら、全身で喜びを表現していた。

“オーク鬼の森”の中では、叫ぶことにより、背後から追いかけてくるオーク鬼が増えていくことに気付かないまま……。

## 第07話 今度こそのおーク鬼（後書き）

やや残酷な描写のようなものがあったので、タグを追加しておきました。

## 第08話 換金は建前で目的で……

アトラにとって、ある程度開けた街の方まで出て来たのは初めてのことだった。

当然のことながら、おのぼりさんには見られなによつて、キヨロキヨロと辺りを見渡しながら歩いたり、物珍しいものに気を取られたりする事が無によつて注意して歩く。

なんてことが出来る人間ではなく。

（うわー。すつごじなー……。前世から考えればたいしたことの無い街なんだろうナビ……）

前世でアトラが住んでいた街も、都会といつ程ではなく、片田舎と称しても違和感が無い程度に寂れた所だった。  
しかし、それでもこの街よりは遙かに大きかつた筈である。  
だが、本物の田舎で暮らした今までの年月、そして日本には無いようなある種の活気がアトラには感じられた。

地面に敷いた布切れの上に、所狭しと並べられた食物、薬剤、小物、武器……。

などなど、様々なものは目新しく、アトラ的好奇心を満足させたし、

自分の並べた商品を買わせよう!と呼び込む声は、生活がかかっている者の必死さや、誇り、強さなど、様々な感情が見えた。

といつても、アトラは物珍しげに商品の数々を見ながら歩くのみだ。

当然、子供で、しかも身なりがお世辞にも良くは無いとはいえ、背中に括りつけたライトエプロンこと十字斧は、明らかに高価な武器に見えるだろうし、それに、そもそもこのよつなかどこるを歩いているのだから、お金を持っているはずだらうとばかり、声をかけられる」ともあつたが、

残念ながらアトラはお金を持たない為、笑顔で断るしかない。

といつても、お金が無いと言えば、すぐに見向きもされなくなるのだが……。

さて、アトラだが、実は手に大きな葉っぱで包んだ何かを持つていた。

その何かというのは、当然ながら先日のアレのことである。

大きい葉っぱで見えないよつに包み隠しているとはいえ、数日以上が経過したオーク鬼の首は、やや臭かつた。季節が悪かつたのもしれない……。

そんなこともあり、アトラがお金を持たないと知ると、むしろつととぞつかに行つてくんないかなー。

とこう視線すら浴びせられた。

それに、た、たのしくない……。なんて思いつつ、とりあえず換金を済ませようとばかり、この街でオーク鬼の首を換金出来る場所について聞いてみることにした。

そうすると、アトラが問いかけた商人は、手に持った“臭い臭いのする何か”と、アトラの顔の間を視線が行ったり来たり、数往復した上で、無いな、と溜息を吐いたりもしたものの、場所については教えてくれた。

この街の治安を護る為に雇われた衛兵達の詰め所……。

つまり、ついにアトラの魔法使いへの道が開かれるのだ！

と思っていたのだが……。

「なんだあ？ ガキがこんなとこにいるよお」

「おいおい、誰か失敗したのか？ やいトムス。お前じやねーのか？」

？」

「馬鹿言ひなよ。俺は抜き打ちには自信があるんだぜえ！？」

「「「あひゃひゃひゃ……！」」

衛兵？

衛兵？

と、首を傾げたくなるような、下品で粗野で、とっても……大きいです。な人達が詰めている場所だった。

「えーと、オーク鬼の首の換金に来たんですけど」

「（）は詰め所で合ひてますか？ と思わず言いかけたが、そんなことを言つとどつてもマイナスに樂しいことになりそつたので、やはり血肅した。

「はあ？ オーク鬼だあ？」

「おいおい、坊主……オーク鬼つてのはな、その体躯たるや人の数倍！ 耳は尖り、目は深紅、歯は黒！

話す言葉はオレサマオマエマルカジリ。手には血のついたトゲ棍

棒を持つて、いつの御伽噺もあるべからぬ凶悪なやつなんだぜ？

お歯黒は別に凶悪な要素じやないんじやないかな。

そんな気もしたが、とりあえず話が進まないし、こんな風に

「ああ、それともお使いかあ？ でも坊主みてーなのの親がオーケ  
鬼と……ね、ふふつ」

馬鹿にされるところのもの、中々に面白く無い」となので、  
といつあえず誤解を解くことに決めた。

「ねえ、おじさん

「おじさん？ 僕あまだ10代なんだがなあ？」

「……せ・生命の神祕」

「ひつ見てもひやつはーとか叫んでそつた人種なのに十代とは……。  
ブロミルとはかくも悲劇を演出するものなのか……。  
なんてややこしいことを考へるでもなく、なんておっさん臭い十代  
なんだ。とだけ思い、  
アトライは続ける。

「それはいいや。

あの、おじさんこの斧がもてますか？」

そう言って、背中に背負っていたライトハッシュロンを持ち上げる。明らかにアトラには不釣り合いな巨大斧。

それを持ち上げると、男達の視線も斧へと向けられる。

静寂。

そして、一斉に唾を飲み込む音が響いた。

ハルケギニアでの主な武装といえば、まず剣となっている。

本来なら剣道三倍段といつ言葉もある通り、槍は剣に対しても上位とされているのだが……。

ハルケギニアで剣が支持されるのは、点で刺すだけでは中々こたえない巨大な魔獣や亜人に対する為には、複数人で動きを止めて首を落とすのが確実といふこともあるのかもしれない。

刺されても死なないマンガ生物は居ても、首を落とされて死なないマンガ生物は多分居ない訳だし。

他にも、見栄えなどは無論で、鍔だけではなく、鞞の装飾等にも凝れる為、貴族層も従者に持たせる為に需要となつてゐることもあげられるのだろうが。

何にせよ、斧とこの武器は珍しい。

だつて斧だもの。

某シミュレーションゲームでも、槍は剣よりも強く、剣は斧よりも強い。

そして斧は槍よりも強い。

なんて説明を読んだ瞬間、首を傾げたくなるくらいに、斧は武器としては微妙なものなのだ。

重いので、使いにくいし、当然ながら持ち運びも難しい……。

故に、斧をアトラガが背負つているのを見ても、変な子供だなと思わせるだけだつただろう。

普通ならば。

しかし、アトラガが背負つていた斧は、眼前に出されてみれば、はつきりと判る。

明らかに普通の斧ではない。

尋常ではない業物、斧を鍊金するの！ そんな情熱を注ぐメイジが居るのか？ と聞いたくなるが、実際に存在するのだから、居るのだろうと納得するしかない。

そして、そういった思考ににきついていた男の中から、一人がアトラの前に進み出た。

「へえ？ その高そうな斧を俺が持つてくかもしれないぜ？」

男は、ニヤニヤと笑いながらアトラを見る。笑つてはいるが、隙あらば斧はもう一撃た、と言いつつ見える。目が笑つていないので。

斧に使われている金属は男達にもわからない。ただ、その存在感が訴えかける。

とんでもない価値を持つていることを。

「構いませんよ、持てるんでしたらね」

それに、負けじとアトラもニヤリと笑い返す。

その日は、持てるはずがないと、確信の色が浮かび上がっていた。

「うひひ、マジか……。これで数年は暮らせんぜー。」

その言葉に、喜び勇み、男はアトラの斧へと飛びついた。

子供であるアトラが持つていて、自分に持てないはずが無い。ならば、この斧は俺のもの。

そして俺の生活費だ！ そう考えての行動だった。

しかし……。

「な、なんだこいつやあ！ つぐうー、つ、ウハハハハハハ！」

持てない。

持ち上がらない。

アトラが手を離したと同時に、男の手では持ち上げ続けることも出来ず、地面に斧は落下する。

それでも男は斧を持ち上げようとしたが、柄を持つた手が重力に引かれ、地面と柄の間に挟まれそうになつたことで、ようやく手を離した。

「な、……なんなんだ！？ この斧はあ……ー！」

当然といえば当然だらう、アトラとい、

アックスマスターといつ斧を持っている間だけ力が向上するアビリティをセッティングしているおかげで、

何とか持つことが出来ているに過ぎないのだから。

例え大人だろうと、聖十字の斧、ライトエプシロンを持つには足りない。

使い手と認められるだけの力量があれば、話は別なのだが、そんなことがあるはずもなし。

「少なくとも、僕には……。

ほーら、この通りです」

そう言つて持ち上げてみせる。実はアトラにも相當重かつたりするのだが、

片手で持ち上げて見せる。

先程馬鹿にされたのが密かに苛立ちとなつてゐるらしい。

実際、自分がもてなかつた斧をあつさりと子供が片手で持ち上げて、茫然自失となつてゐる男に、見せびらかすかのように、斧の柄を持って、ほら催眠術と言ひながらゆらゆらと揺らしたりしてゐる。

実は手が引きつりそののだが。

.....

「疑つて悪かつたな……それで、そっちの包みか？」

それでも、まだ子供が相手といつことで、何か化かされたかのような心境ではあるが、

衛兵（？）達の一人が、責任者を呼びに奥に行き……。

アトラはその間に、謝罪の言葉をもらっていた。

「いえいえ。

そうです、これが本某初公開！ オーク鬼の生首とはこれのことだ！」

その態度に楽しくなってきたのか、ノリノリでオーク鬼の首から、葉っぱを取り去る！

効果音が出そななくらいに、大々的に、オーク鬼の首が衆目に晒される！

「ひやつほー！ 生首だぜー！」

「今晩はオーク鍋だ！ 生首シチューだ！」

「小僧！ よくぞやつた！」

そんなアトラのノリに、ついでこれる衛兵達は手を上げながら、ノリノリである。

「いや、ワシらは仕事だからたまに見るんだがな」

しかし、それに冷静なツッコミを入れる男、……。

そう、彼こそが衛兵達のリーダーである。

来た……！

アトラの目が光る。

衛兵達はどう見ても肉体派だ。

もしこの衛兵達がメイジだとすれば、メイジ（笑）の間違いなのではないかと言いたくなるくらいに。

だが、リーダーともなれば、例えメイジ（笑）だろうが、メイジではあるはず……。

だつて責任者なんだもの！

そういう思考で、男達のリーダーを見つめる。

やや白髪が目立つ壮年の男。

しかし、その眼光は鷹のようだに鋭い。鍛え上げられた体躯はさねど、細身を維持しており、インナーマッスルを地で行きそうな容姿だ。当然ながら、インナーマッスルなので、アトラには細身とこいつだけしか判らなかつたが。

しかし細身であることがメイジであるところとの裏付けではないかと考えられた。

「握手しましょ！」

思わず、第一声がそれだつた。  
勿論、それが通るはずもない。

「握手……？ 坊主、何言ひてるんだ？」

訝しげにアトラを見つめるリーダー。

アトラは、まさか握手をしてもらえないとは……なんて陰険なやつだ！ と思う訳でもなく、何故握手してもらえなかつたのか、握手してもらう為に大事なことは何か、思考を展開せしむ。先に考えておけよとは言わない約束である。

「ほ、ほら……。オーク鬼の首を今回持つてきたじゃないですか？」

苦し紛れに、とつあえず場を繋ぐ為に言の葉を紡ぎ出す。

「おひ、それが？」

問い合わせされ、どう言つか……。珍しく悩む。握手しようつと言つて続ける以外の方法を考えるのは大変だ……。

「それで、これから巔原……じゃなくて、こちらで換金をさせてもらうことになりそうなので、お近づきの品にてることです」

言い終えて、苦し紛れに言つたものの、理屈としては一応通つていよいように思えた。

そもそも、オーク鬼というのは、亞人にあたるのだが、人とミニミニーションをとるのも困難だし、人を襲うことに疑問を感じず、一度襲い掛かれば躊躇の限りを飛ばす、正しく害獸とも言つべき存在なのだ。

だからこそ、オーク鬼を討伐すれば賞金がが出る。これは、平民に対するアピール以外にも、貴族達とてオーク鬼にいつ襲われるか判らない為だ。

自分達が襲われるとなれば、そのような環境を良しとするはずもない。その上、仕事をしつかりしているところアピールを国に対してもするといつ側面もあるのだ。

だから、オーク鬼の首を渡せば国からの賞金が出るのだし、首の数から、多くのオーク鬼を討伐した街の詰め所には、国から別途に詰め所に報奨金が出る場合すらもある。

ともなれば、多くのオーク鬼を討伐出来る傭兵の存在は、衛兵達にとってもありがたいことなのだ。

「なるほどな……そんな歳だっての、中々に気が回る。  
いいだろ、ならば握手だ」

そう言つて、豪快に片手をアトラへと向ける男。

それに、内心で自分に喝采を送り、両手にマラカスで小躍りする  
光景を思い浮かべながら、にこやかにアトラは手を差し出し、  
手と手を合わせた。

これ即ち、握手なり。

「長いな……」

「ハルケギニアは一日にして成らず。友好を深める為には時間が大  
切なんです」

「ほう、坊主は中々に深いな……気に入つたぞ。  
なら、一時間くらい握手するか！」

「それは長い！」

だが、十秒は余裕で待てる……。

そして、アトラの意識内に、チャイムのよつな音が鳴り響いた。

新たなるジョブの登録が完了したことを告げる音ー。

ついに魔法使いになれる……！

期待と共に、アトラは意識内のジョブを……。

ジョブ

『無職』 [↙↙ -]

『農民』 [↙↙ 4]

『ウォーロック』 [↙↙ 0]

NEW『メイジジャー』 [↙↙ 0]

何か表示が少し新しくなっているが、それはアトラが能力に慣れ

て来た為だらう。

ともあれ。

(やつた……！ メイジ……だ？)

確認。

……

……

確認。

……

……

あれ？

「おこ……」

「おつ…ビラしたんだ？」

相変わらず握手をしながらではあるが、訝しげな顔をする壮年の男。

「いえ？……………いえ？」

「何だ。変なやつだな……………」

メイジをストックするつもりが、メイジカラーをストックしてしまった。  
な、何を言つてこるのか（後略）。

とつあえず……………。

ありえん。

それでも、根のポジティイヴさが落ち込ませることをさせない。

いやいや、これでメイジになつた時には、メイジだけメイジ殺しでもあることになるんだ。

メイジがメイジ殺しなんて、吸血鬼が吸血鬼ハンターになるようなもんじやないか！

ん？ それってよくあるような気がしてきた。吸血鬼の吸血鬼ハンターなんてお約束じやないか！

いやいや、やつぱり何か違つよな。

微妙に混乱したアトワは……。

……

果然自失のままに換金を終え。

「じゃあな！ また来いよ！」

手に入れたエキュー金貨を数えることもせず、詰め所から外に出ていた。

……

そして、暫く歩いて、ようやく我に返つたのか、

「か、かぐにん！」

叫ぶ。

そう、まずは確認だ！

そう考へて、アトラは自分の左手と右手を繋ぎ合わせ、目を開じる。

そうすると、意識化に浮かび上がるジョブステータスっぽいもの。そこで、選択する。

「↙「ジョブ確認」「メイジキラー」

意識化で操作を行うと同時に、浮かび上がる情報。

メイジキラー

「転職条件を満たしていません」

「転職条件：メイジを一人以上殺害」

「過去に多くのメイジを殺し、メイジ殺しの称号を得た人間だけがなれる職業」

## アクションアビリティ

隙を狙う

杖を狙う

「石、弓、銃のいずれかが必要」

(メイジの持つ杖を狙う。成功すると、メイジはただの人間に) (効果：杖喪失)

飛弾・腐った卵

(腐った卵を矢のように相手へと投げる。卵を割れないように、かつ素早く投げる技術は脅威) (効果：戦意喪失)

飛弾・コショウ玉

(コショウが入った玉を投げつける。調味料は中世だと高価なので、地味に財布に痛い技) (効果：沈黙)

隠れる(ハイド)

(最後に生き残った者が勝ち。メイジから姿を隠す。ディテクトマジックで調べ難そうな場所に隠れるのがコツ。メイジ以外からも隠れられる)

サプライズアタック

(メイジを社会的に抹殺するコンボスキル)

(隠れるを使用中のみ可能。油断しているメイジを奇襲する)

×メイジキラー 「必要な能力が足りません

## リアクションアビリティ

サポートアビリティ

メイジキラー

(周囲数メートル以内に居るメイジが、重度なら恐怖心、軽度なら苦手感を感じる) (効果：恐怖)

メイジ判別

(優れた嗅覚はメイジと一般人を見分ける…)

## ムーブアビリティ

現れた情報は、アトラにとっては衝撃のものだった。

（メイジキラーしょぼつ。何といつセロセー。これが平民がメイジに勝つ為に必要な戦い方なのか……。  
ある意味、メイジがメイジ殺しを恐れる気持ちが判つたような気がする）

というか、あの渋い壯年の男が、腐った卵をメイジに投げつけたりしていたのか、

そう考へると、アトラは何だかもの悲しく……。

（見てみた過ぎるー。）

なるような人間でもなかつた。

現状、全然役に立たないジョブを手に入れてしまった訳だが、とりあえずはウォーキック修行中なのだから、大丈夫、問題は無い。

よつやく本当に我に返つたアトラは、メイジはまたの機会を狙う

「とにかく、とりあえず稼いだお金で買い物をしよう」と決めた。

（やつやの露店とか面白にもの売ってたし……）

「くく」

これからすることを考えると、笑みすらも浮かぶ……のだが。

ふと顔を上げて見ると、既に外は暗くなっていた。  
それも仕方の無いことだらう、この街 자체、アトラの村からはかなり離れた場所にあるのだ。  
明け方から歩いてきたとはいえ、そんな時間になってしまっても仕方の無いこと。

となると、露店も店じまいを始めているのが視界に見える。  
中世な世界では、メイジはいざ知らず、平民の場合には灯りは人々に貴重なものなのだ。

街行く人達も、心無しか、急ぎ足で歩いてるよう見える。

幼い子も、家路を急がなことばかり、早足でアトラの横を通り過ぎていくのが見えた。

子供はもう帰る時間なのだろう。平民の子供が遊んだ帰りということもないのだろうが。

「げげ……」

ともあれ、アトラは、その様子に眉根を顰める。

それもそのはず。稼いだお金でこれから買い物を楽しもうと思つたら、商品が逃げていったようなものなのだから。

だが。

どつぽ。

弱り目にたたり目。

踏んだり蹴つたり。

泣きつ面に蜂。

様々な言葉が示す通りに……。

「仕方ない、今日は……そうだー宿をとひつー宿なんて初体験だよ！ 楽しみだな～」

あつという間に取り直したアトラは、先程手に入れたエキュー金貨を数えようと、懐に手を伸ばし、そして……。

「……」

「ない」

そう、無かつた。

お金が、無かつたのだ。

「……これは無い」

そして、こんな展開は流石にアトラクトとしても無かつた。

第08話 換金は建前で且約や……（後書き）

最近遊んでるゲームがアップデートされたばかりで、そつちで遊んではぱっかりなのですが、何となく思いついたので続きを書いてみました。

## 第09話　逃げた先

ねんがんのオーク鬼を倒し、そのお金を換金することにも成功したアトラ。

しかし、本来の、メイジをジョブセッティングに新たなジョブとしてストックするという目的については……。

握手 자체は成功した。

したのだが……。

アトラの握手した相手はメイジではなくメイジキラー。

明　だと思って牛乳を買つたら雪　だつたといひくらいの違いである。

驚き、混乱したアトラだつたが、少し時間はかかったものの、持ち前のポジティヴシンキングで、気を取り直すことが出来た。

そして、気を取り直したこと、改めて買い物をしようと思通りに出たのだが、  
気がつけば周囲は暗くなっている……考え方をする内に夜になつていたのだ。

それに、不意に懐を探つてみると、換金して手に入れたばかりのお金が無かつたりした。

財布を掏られてしまつたらし!。

何とも世知辛い世の中である。

とはいへ、それも仕方が無いことではある。大金を手に入れたばかりの子供が歩いている。こんなものは、カモがネギをしゃつていてるようにならうにしか見えなかつたのではないだらうか。

それに、先程までのアトラは、あれこれと考え事をしていた。

隙だらけだつただらう。

隙だらけの子供から財布を掏り盗ることなんて、スリにとつてはお茶の子済々だつたに違ひない。実際掏り盗られている訳だし。

だが……。それで納得する訳にはいかない。

アトラはポジティヴ、といふか楽天的な少年だ。

大抵のことは笑つて流せるし、苦しいことも楽しこよつてのよつて感じることも出来る(マジ?)。

だが、手に入れたばかりのお金を掏られたら、これは流石に樂しくない。

なら、取り返すしかないだろつ。

アトラは、どこで掏られたを考えることにする。

考え方をしていても、視界には映っていたはずである。

アトラの記憶力は悪くない。

なら、自分の前で妙な拳動をした人物が居なかつたか？

それを思い出せばいいのだ。

(変な人、変な人……変な人、変な人)

どうでもいいが、往来の真ん中で腕を組んで考え方をするアトラは、間違いなく変な子供である。

事実、道行く人達は、アトラをじろじろと注視しながら、

それでいて、アトラと視線が合いそうになつたら、慌てて逸りしつつ、通り過ぎていく。

(変な……人?)

そういうえば、先程、考え方からアトラが戻ってきたばかりの時のことだ。

自分のすぐ横を、幼い子供が通り過ぎていった。

そう、先程は、家路を急いでいたのだらうと思つたが……。

外はもう真っ暗なのだ。

地球なら有り得る光景だが……、ここはハルケギニア。

子供がこんな時間に一人で出歩いているのか?

と、自分のことは棚に上げて考える。

いるんじゃない?

結論はあつさつ出した。

そういうこともあるかもしないと。

アトラは深く考え事をするのが苦手なのだ……。

といえば、それでも気付くことはある。

でも、と思ったのだ。

(あの子……何であんな布切れを被つて歩いてたんだろう。)

そう、サリーの如く、布切れを身体に覆いかぶせるようにして、歩いていた。

その姿はよくよく見えてみると……。

(ナニいえば、あの子って、かなり変な人だったなあ)

正確にいえば変な子供ではあるが、アトラの探していた条件と合つたとは確か。

やつた……！ やつた……！

早歩きで、街の出口を目指す。

少女……、幼女と云つても良いような年齢の彼女は、急いで居た。

彼女は、もう一ヶ月程も逃げ回っていたのだ。

彼女にとつて、食事として必要とするものは、普通の人とは違つてゐる。

それでも、彼女は人間と同じ食事をとりたいと思つてしまつ。

割り切れないから。

だが、幼女がお金を稼ぐ方法なんでものがある筈が無い。

だから、森で獣を狩つて、それを食べるくらいしか出来なかつた。

あまりにも辛いサバイバル生活。

一ヶ月程前までは、両親の元、安定した食事を供給されていたのだから、

尚更に辛い。

彼女は、見た目ほどに幼くはなかつたりもするのだが、

人から見れば幼女だし、能力的にも幼女と大して違はないのだ。

しかし、獲物を獲ることも辛かつたが、それ以上に辛かつたのは、住居や着る物について、である。

彼女は、住居が無ければ生きていこうことが難しいのだ。

今まで、何とか、家を出た際に持ち出した布切れを使うことでのりできたが、それも限界。

女の子なので、やはり身体や服の汚れのことも気になる。どうしても現状を打破したいと思つてしまつのだ。

だが、それにはお金が必要だった。

そして、彼女のような幼女がお金を得る方法は……盗むしかない。

だが、あくまで彼女は幼女の能力しか基本、持ち得ない。

盗む相手が屈強な男などでは、成功させるのは難しかった。

だが、そんな彼女の前に、ネギを背負った力モが現れたのだ。

彼女から見ても、さして身長が変わらないような少年。その少年が、葉っぱのよつたもので包まれたオーク鬼の首を手に、換金所へと入つていくのを目撃した。

(……やるしかないわね)

換金所から出て来た所を狙おう。

そう考えて待っていた。

どうやって掏ろう?

考える。

無理矢理奪うのはどうかしら?

だめね。ないとは思うけど、正義感のある人があの男の子に加勢するかもしれない。

なら、ぶつかつた振りをして掏ればいいんじゃない?

出来るかしら……。わたしは掏りなんてしたこと、ないのに。

あの男の子が、どこにお金を持つか、それが大事ね。

あの男の子が出来たら、まず見るのが大事。

それで、わたしでも掏れそうな場所にお金を持っていたら、ぶつかつた振りをして刷る。

そうでなかつたら、人気の無いところへ行くのを待つて、強引に奪い盗るしかない。

そう考えて、彼女は少し胸が痛むのを感じた。

こんなはずじゃなかつたのに、と呟く。

わたしは、人間が嫌いなのかもね。

だけど、まだ人間であることを捨てられない。

そして、人間が生きていくのには、お金が必要だから……。

だから。

胸に感じる痛み。罪悪感を感じながらも、待ち続けた。

そして、周囲が暗くなり始めた頃、よつやくあの男の子が、換金所から現れた。

何か考え方をしながら……。

(今から掏りついと困つてゐわたしがこんなこと考へるのは変だけど……、  
あの男の子、もうちょっと気をつかうべきよね)

大金を持ちながら、考え方をするなんて、馬鹿としか言ひようがない。  
日本の治安が良すぎた為に、転生しても尚、お金に対する気の緩みを持ち続けていたのだ。

だが、そんなことを知らない彼女には、抜けた少年にしか見えない。

少女が見守る中、男の子が、何か考え方をしながらも、お金を懐に入れるのが見えた。  
あそこなら……ぶつかつた振りをすれば……。

そう考えていたら、今度は男の子が、自分の手と手を繋ぎ合わせ

はじめた。

(へん……)

どう見ても、係わり合いになりたくない、変な子供であった。

だが、彼女としては、関わらなくてはいけない。

スリと、その被害者とこうした関係として、ではあるが。

男の子の隙を狙いつつ、機会を待つ。

そして、自然に、自然にぶつかって、お金を掏る……。自分に出来るのかと、自問する。

出来なければ、ぶつかっただけのように見せかければいいと、逃げ道を作ることで、自分を後押しして……。

そして、ようやく実行に移そつと決意することが出来た。

自然に、頭の中でその言葉を畳えながら、男の子へと近付き始めた……  
その時。

急に彼は、頭を両手で押さえてうなり出したのだ！

凄く変な子供にしか見えない。

男の子の奇行に、内心引いていた彼女だったが……。

それでも、男の子へと歩こて近付いていく。

頭を抱えるのは止めたようだが、まだ何か考え方をしていろうに見える。

何かにやにせとし始めたのだから、確かだらう。

これはいわゆる、隙だらけとこつものばず。そう考えて近くへ付く彼女だったが……。

その時に見た。

頭を抱える時、急に胸を反らしたことで、懐に入れていたエキュー金貨が落ちかけているのを！

(……落ち、るー)

だから、彼女は、足を僅かに速めて、近付き、そして……。

すれ違こざま、一度落卜しかけたエキュー金貨を掴んだのだ。

後は、その場では後ろを気にしてはいたが、

……

注目を集めない為に、急に走り「みづな」とさせず、歩いて立ち去った

そして現在は、街の門を田指して歩いている所だった。

もつちよつとで逃げ切れる。街から出るといわんれば、後は嫌だけど、数日を森の中で過ごして、それで近くの街に行けば、服だって買えるし、それにひよつとした屋根のある家を手に入れられれば……、と考えながら。

街の門を……出た。

「あは……」

(やつた……！ 逃げ切れたのよー！)

彼女は、自分のもくろみが成功した喜びに、快心の笑みを浮かべた。

罪悪感だのはさておき、今は、自分の思い通りに成功したこと。そのじへの喜びで満たされていた。

そして、そのまま、森に入ると、布切れの中から、盗み取った布袋を取り出し……、  
金貨を数えようとして……、そして。

「やつぱつ……君だつたんだ」

かけられた声。

彼女は、その声にハッとして、振り返る。

するとそこには、彼女がお金を掏り盗つた相手の子供。

男の子が、彼女の手に持たれた布袋を見つめていた。

## 第09話 逃げた先（後書き）

設定を前に投稿しなおしたので、消そうと思ったのですが、何やら特殊な事情が無い限り、消してはいけないらしく……。仕方なく時間を気にして、無理矢理続きを書いてみました。

口調が原作と違うのは……、アトラと混じってややこしかったんですね。

ごめんなさい。

設定については、かなり捏造改变があります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8267n/>

---

楽しく生きる為に

2011年10月6日20時31分発行